

【飛鳥川】 あすかがは

大和朝廷の黎明期より古代史の舞台となってきた明日香の地を飛鳥川は流れています。

「あすか」は「明日香」と表記しますが、明日香の枕詞が「飛ぶ鳥の」であることから「飛鳥」とも表記するようになりました。

水源は高市郡竜門、高取山付近の山地で、柏森、稲淵、祝戸を経て盆地へ降り、石舞台のある島之庄、甘櫛丘、藤原京跡などの史跡を通り明日香の地を北西に横切る小川です。川下で大和川に注ぎます。近年、発掘や研究が進む古代の苑池遺構は、いずれもこの川があればこそ造られた遺構です。

- ・昨日といひ今日とくらしあすか川ながれてはやき月日なりけり 『古今集』 春道列樹
〔昨日は今日とは暮らしていると明日香川の流れるように月日の経つのは早いものだ〕
- ・明日香川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ 『古今集』 よみ人知らず
〔明日香川の深い淵が浅い瀬になるような移り変わる世の中でも愛する人は忘れはしない〕
- ・川は飛鳥川。淵瀬も定めなく、いかならむとあはれなり。 『枕草子』 清少納言
〔川は飛鳥川。淵と瀬が変化し、その心細さに心がいたむ〕

これら古典に代表されるように平安時代以降、飛鳥川は二つの意味を持つ川であったようです。一つは月日の流れの早さ、もう一つは定めなき世の喩えです。

前者の明日香川は月日の経過を川の流れに喩え、昨日、今日、明日香川という語呂を利かせた発想です。先の列樹の歌はその代表で類形の歌は近世まで多数あります。

後者は、深い淵が浅い瀬に変化するような定めなき世という意味です。

この場合、なぜ飛鳥川なのでしょう。飛鳥川は蛇行し流れが頻繁に変化したためという解説をよく見かけます。しかし、これは川の実態とは少々異なります。古代の河川に氾濫はつきものですが、飛鳥川が特に氾濫の多い川だったわけではありません。歌人が川を実見していたであろう『万葉集』には川の流れを「早み」と詠む歌はあっても流域の変化を強調する歌はありません。「淵瀬も定めなく」といった表現はむしろ大和の地から都が平安京へ遠ざかって以降盛んになっています。この川は平安時代には有名な歌枕となりますが、歌人は実見しているわけではないのです。

明日香川が定めなき世を表わすのは川の実態とは関係なく、歌人が「明日」という言葉により明日への悲観的、感傷的観点から「定めなき世」を連想したからではないでしょうか。『万葉集』

の ・年月もいまだ経なくに明日香川瀬々ゆ渡しし石橋もなし
などはこうした比喩的表現の萌芽を匂わす歌と思います。

明日香川⇒「あす」「流れ」⇒ 月日の流れが早い⇒ 定めなき世、といった連想の展開は日本人
がやがて無常観へたどり着く過程でもあります。

中興名物、瀬戸金華山窯茶入の「飛鳥川」は先ほどの列樹の歌を引いて遠州が命銘したもので
す。列樹の歌の詞書には「年のはてによめる〔年の暮れに詠んだ〕」とあります。そのため、飛
鳥川手茶入やこの銘の諸道具は、歳暮の茶会によく使われます。暦手の茶碗や「無事」の一行も
師走の常連ですね。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

～ Copyright (C) 2011 ～私の書齋～ 森田文康. All Rights Reserved.～